

2021年6月20日

説教題「心の向きをかえて」マタイ18章1～5節

大井バプテスト教会

主任牧師 加藤 誠

**「本当にわたしは君たちに言う。もし心の向きをかえて子供のようにならなければ、君たちは決して天の国にはいないであろう」(マタイ18・3 岩隈直訳)。**

主イエスの弟子たちはしばしば「誰が一番偉いのか？」と議論をしています。今朝のマタイ18章でも「天の国では誰が一番偉いのですか？」と主イエスに尋ねています。「天の国では…」、つまり「神さまの目から見たら、どのような弟子が一番評価され、ほめていただけるのでしょうか？」という問いです。

弟子たちは主イエスの宣教活動を手伝っていました。主イエスが語る神の国の福音を人々に紹介し、病を癒したり、悪霊を追い出したり。二人一組で福音宣教に派遣されてもいます。他のユダヤ教の教師の場合、弟子は昼も夜も聖書の律法を一生懸命に勉強して、どんな質問にも答えられるようになると「一人前の教師」として認められます。ところが主イエスは弟子たちにそのような聖書の勉強を課している形跡がありません。主イエスはいったいどんな弟子を望まれているのか。神の国の福音を人びとに分かりやすく語れる弟子が評価されるのか。それとも癒しに優れた弟子、悪霊を追い出す力に優れた弟子が評価されるのか。彼らは「神さまの前にはどんな弟子が喜ばれるのか」を知りたいと思ったのでしょうか。

漁師であったペトロやアンデレたちの場合、「魚の群れの動きを読んで、魚を多く水揚げできる漁師」が「優れた漁師」としてたたえられたことでしょう。徴税人だったマタイの場合には、「脱税を見逃さず、しっかり税金を取り立て集める徴税人が「よくできる徴税人」として評価されたことでしょう。私たちの社会ではそのような評価が常についてまわります。「良い会社員」「良い先生」「良い父親」「良い母親」など。「良いクリスチャン」「良い牧師」という評価もありえます。そのような周囲からの評価に心縛られて、日々一喜一憂している私たちがいないでしょうか。しかし、そのような評価は比較を生み出します。比較は優越感や劣等感を生み出します。そして時には、そのような仕事上の評価や信仰上の評価が、その人の存在そのものの評価(生きている価値がある／生きている価値がない)につながる錯覚に陥り、その人を大きく苦しめることも起こるのです。

そのような「評価」に縛られている弟子たちに主イエスは語られました。

**「本当にわたしは君たちに言う。もし心の向きをかえて子供のようにならなければ、君たちは決して天の国にはいないであろう」(マタイ18・3 岩隈直訳)。**

「心の向きをかえて子供のようにならなければ」とはどういうことでしょうか。「子どものように」とは、子どものように「素直で、まっすぐな心をもつようになる」という理解もありますが、わたしは「子どもが大人に保護されなければ生きていけない弱い存在であることを本能的に知っているように、自分は神の愛と赦しと養いなしには何もできないことを知る」という意味に理解しています。一方で弟子

たちは「少しでも有用な役に立つ弟子になることが主イエスに喜ばれ、評価される」と考えていた節がありますから、その弟子たちが「子どものようになる」ことは、心の向きの大転換が求められたのです。それは神さまの前に自分の小ささを認め、人々の間で「有用なものと認められたい」という思いから解放される道です。そのとき、私たちは『天の国』という、神さまが与えてくださる愛と信頼と喜び、希望を味わい生きる者とされることを主イエスは教えられたのではないのでしょうか。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』にゾシマ長老(ロシア正教の聖職者)が登場します。ゾシマは若かりし頃、将来を嘱望されたロシア軍将校でした。社交界にも出入りして若さを謳歌し、誇りと自信にみちていました。ところがあるとき、二ヶ月間の出張から戻ってみると、ゾシマが心を寄せていた女性が結婚してしまっていたのです。自尊心が深く傷つけられて激高したゾシマは、彼女の夫を人びとの前で侮辱した挙句に決闘を申し込みます。いよいよ決闘が翌朝に迫った夜、酒に酔って自宅に戻ったゾシマは、彼に仕えていた部下の従卒に何の理由もなく殴り倒します。翌朝、小鳥のさえずりに目を覚まし、いよいよ決闘に出かける時になって、ゾシマは自分の心の中に醜く、下劣なものをさぐりあてて愕然とするのです。小鳥たちが神をほめたたえている美しい世界にあって、嫉妬に燃え、自尊心が傷つけられて憤り、何の抵抗もしない部下を殴り倒し、善良な他人の夫に決闘を申し込む自分という人間は、なんと歪んで醜悪に満ちた生き方をしているのだろうか、鋭い針で魂を突き刺されたかのような痛みを覚えるのです。そして八歳上の兄が死に際に語った言葉を思い起こします。兄は世話をしてくれてきた召使いたちにこう語りました。「なぜみんなは僕のような者に仕えてくれるんだい？ いったい僕にそんな価値があるのだろうか？」、「人間は誰でも、すべての人に対して罪がある。もしそれを知ったなら、すぐにでも天国があらわれるに違いないんだ」と。この兄の言葉が心によみがえった時、ゾシマは自分の理不尽な暴力を黙って受けてくれた部下の姿が思い出されて、彼の前にひれ伏して赦しを請いたいと願い、行動に移します。そして決闘の相手に対しても、自らの愚かなふるまいを詫びたのでした。その時、ゾシマの中に神の造られた美しい世界に生かされている喜びが不思議にあふれたのです。まさに今日の聖書箇所の主イエスが弟子たちに言われた言葉、「心の向きをかえて、天の国を味わう」ことが、青年将校ゾシマの中に起こったのです。

私たちの世界において、人びとの心を縛っている評価。優越感と劣等感を生み出し、人と人との間に「上下」があるかのような錯覚に陥らせる価値観。そのために神が創られた世界を小鳥たちのように賛美することができなくなっている私たち。その私たちが「心の向きをかえて」、私たち一人ひとりを「神の子ども」として深く愛して下さっている神の愛にまず目を注ぐ。神の赦しなしには隣り人の前に立つことのできない、卑しく醜い、自らの罪を認める。そのとき世界は神に造られた美しさをもって私たちを包み始めるのです。「心の向きをかえて」。主イエスが今日、私たちに語りかけ、招いておられる神の国の世界を味わうことができますように。